

文化遺産国際協力コンソーシアム 第23回研究会 報告書

諸外国における文化遺産保護の 支援と協力を知る・語る



はじめに

文化遺産国際協力コンソーシアム（以下、「コンソーシアム」とする）は、文化遺産分野の国際協力に関わる専門家や諸機関を会員とし、会員間のネットワーク構築と情報共有をめざし設立された組織である。

コンソーシアムでは「国際協力調査」として、国際協力調査支援の対象となる国のニーズを調査する「相手国調査」、支援を行う国の体制を調査する「支援実施国調査」などの調査を行っている。平成27年度には韓国、平成28・29年度には欧州の7か国を対象とした支援実施国調査（体制調査）を行い、その成果をウェブサイト上で公開した。

●韓国調査報告書

https://www.jcic-heritage.jp/wp-content/uploads/2012/04/2015_korea.pdf

●欧州調査報告ページ

<https://www.jcic-heritage.jp/page/research2018/>

この研究会は、上記の平成27～29年度に行われた支援実施国調査の成果を広く周知するとともに、文化遺産国際協力への参加者の理解を深めるためワークショップの形式で行った。以下、その概要や成果を報告する。

目次

はじめに	1
ワークショップの概要・プログラム	2
ワークショップの手順	3
第1ラウンド	4
第2ラウンド	6
報告・総括	8
・ファシリテーターによる各国の報告	8
・参加者からの発言	11
・ファシリテーターのコメント	12
参加者アンケート	14

ワークショップの概要

ワークショップの概要は以下のとおりである。

- 日時：2018年7月24日（火）13:30-17:30
- 会場：赤坂インターシティコンファレンス 401
- 参加者：39名
- ファシリテーター：(【】内は担当国)
 - 【韓国】青木 繁夫（東京文化財研究所 名誉研究員）
 - 【ベルギー】井内 千紗（国際短期大学 専任講師）
 - 【フランス】羽生 修二（東海大学 名誉教授）
 - 【ドイツ】海老澤 模奈人（東京工芸大学工学部 教授）
 - 【イタリア】松田 陽（東京大学大学院人文社会系研究科 准教授）
 - 【オランダ】藤岡 麻理子（横浜市立大学グローバル都市協力研究センター 特任助教）
 - 【英国】岡村 勝行（大阪文化財研究所 東淀川調査事務所長）



プログラム

- 13:00 開場
- 13:30 開会挨拶
岡田 保良（文化遺産国際協力コンソーシアム副会長・国土舘大学イラク古代文化研究所教授）
- 13:35 開催趣旨
泉 拓良（文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会長・京都大学名誉教授）
- 13:50 第1ラウンド
- 14:40 休憩
- 14:50 第2ラウンド
- 15:40 休憩
- 16:00 各ファシリテーターの報告・総括
- 17:20 まとめ・閉会挨拶
泉 拓良

ワークショップの手順

ワークショップはワールドカフェと呼ばれる手法を参考に、5人前後の小グループによる対話形式で行った。平成27～29年度に文化遺産国際協力コンソーシアムが行った国際協力調査の対象国（スペインを除く）ごとに7つのグループを設置し、グループにはそれぞれファシリテーターが参加して話し合いを進行した。ファシリテーターは、上記調査の担当者を原則とし、参加できない場合には各国の文化遺産政策に知見のある研究者が務めた。

ワークショップは第1ラウンド・第2ラウンドからなる2部構成とし、ファシリテーター以外の参加者は第1・第2ラウンドでそれぞれ違うグループに参加することとした。

各グループのテーブルには、資料としてそれぞれの国の調査結果を配布し、各ラウンドの冒頭でファシリテーターが調査結果の概要を説明した上で、参加者自身も自由に参照できるようにした。

また、今回のワークショップを行うにあたっては、以下の点に留意した。

- ・結論を出すことを目的とするのではなく、参加者全員に発言の機会を設ける。
- ・異なる意見を尊重し、他者の意見を否定しない。
- ・知識の有無に関わらず誰でも発言できるような雰囲気作りを行う。



開始前の卓上



岡田副会長による開会挨拶

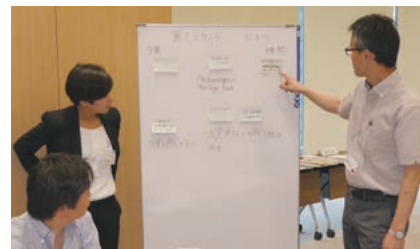


泉欧州分科会長による趣旨説明



ワークショップの様子

第1ラウンド



第1ラウンドは以下の要領で行った。

- **ファシリテーターによる説明（15分）**…ファシリテーターが各国の調査概要の説明を行う。
- **意見を書き出す（5分）**…説明を聞いて感じたことをコメントとして書き出す（疑問・気づき・関係する情報など）。
- **話し合い（10分）**…集まったコメントを見ながら意見を交換する。
- **意見を書き出す（5分）**…話し合いを受けて考えたことを書き出す。
- **話し合い（20分）**…集まったコメントを見ながら意見を交換する。

各グループで寄せられたコメントの一部を紹介する。

韓国

韓国のグループでは、韓国内の法律の特徴や、日本との相違点、文化遺産国際協力の相手先に着目したコメントが多く寄せられた。

- ・文化財保護法は日本と似ている部分が多い
- ・韓国は文化政策を重要国策の柱の一つと意識しているイメージあり
- ・文化財財団が中心になっているが、どのような人材が属しているのか
- ・大統領（政権）交代ごとにトップが替わるが継続性はどうか
- ・韓国の歴史、文化研究や振興の一環として中国東北部やモンゴルの研究援助に熱心である
- ・アジア以外の国での文化遺産国際協力はあるか

ベルギー

ベルギーのグループでは、ベルギー国内の共同体・地域から成る複雑な構造に関心が集まり、また、国際機関への関わりについても話題に上った。

- ・ベルギー国内の文化遺産にはどのようなものがあるのか、その保護方針と国際協力の関係は？
- ・無形文化遺産など遺産をUNESCOなどに登録するとき、地域間で問題など起きないのだろうか
- ・国内諸機関同士で援助対象国や資産を決める際に協議等をする場はあるのか
- ・多くの欧州国の対外支援は旧植民地との関係が多いが、今は？
- ・国家機構が複雑、支援のあり方も（国、各共同体、さらにNGO）もう少し整理した議論が必要
- ・国際協力のきっかけのひとつがアテネ憲章とのこと。具体的にどういう人たち、事業があったか

フランス

フランスのグループでは、主に国内文化遺産の修復や景観保護に関心が集まった。また、フランスの文化政策の歴史的背景や、国の体制、組織についても話し合われた。

- ・保護政策の手厚さに驚いた！活用についてどんな動きがあるか
- ・保存修復の手法、内容の評価法について、法律などで定められているのか

- ・景観保護のエリア設定に一定のルールは？（看板規制、高さ）
- ・ZPPAUP等、景観をからめた法律と国内文化財保護法の位置づけについて
- ・ヨーロッパの建築は何百年も維持しているとのことだが、どのように維持しているのか
- ・文化遺産の保護、活用で先進的な地域圏はどこか

ドイツ

ドイツのグループでは、ドイツの政策に対するイメージや、教育、大学に関する疑問などがキーワードの形で提示された。また、第二次世界大戦の影響についても話題に上った。

- ・独全体としてのfocusは？
- ・動産文化財：連邦（国）単位 不動産文化財：州ごと（州によって予算のかけ方が違う？）
- ・ドイツ連邦として文化財保護への資金 増or減？／日本や他国と比べて 多or少？
- ・大学、研究機関の存在感が大きい
- ・第二次世界大戦の反省？

イタリア

イタリアのグループでは、修復等に携わる人材に関する疑問や、イタリアの行う国際協力の対象、イタリア側の国際協力の受け入れなどが話題になった。

- ・民間資金の受け入れ→徐々に進んでいる
- ・修復家→個人が多い
- ・支援は国費が多いのか、それとも民間は別にやっているのか
- ・外国支援では特に多い（大きい）のはどこ？旧植民地近隣？
- ・地域レベルでの文化財行政の状況
- ・イタリア国外からイタリアへの支援

オランダ

オランダのグループでは、旧植民地に対する文化遺産国際協力に関する質問が多く寄せられた。また、災害後の緊急援助の仕組みについても関心が集まった。

- ・「コモンヘリテージ」として旧植民地の遺産を世界遺産にすることは強い政治性があるのではないのか
- ・旧植民地において、植民地時代の遺産だけでなく、仏教遺跡等にも支援はしているのか
- ・他の欧州列強との旧植民地遺産に対する態度と比べてどうか
- ・地元の受け止め
- ・プリンスクラウスファンは2009年地震のブータンの被害に対して支援した（旧植民地以外にも支援実績）
- ・緊急援助のしくみがあるのは特徴的

英国

英国のグループでは、英国の海外に対する文化政策について関心が集まった。また文化遺産保護における資金や制度が充実していることなどが話題に上った。

- ・海外の拠点研究所が充実している
- ・ブリティッシュスクール、予算源に関して
- ・国民総所得の0.7%という額を国際協力に充てることに対する国民感情
- ・イギリスの海外での考古学調査の現状、特徴（現地人材、教育等）
- ・豊かな助成金制度
- ・チャリティ



第2ラウンド



第2ラウンドは以下の要領で行った。※参加者は第1ラウンドとは別のグループに移動する。

- **ファシリテーターによる説明（15分）**…ファシリテーターが各国の調査概要の説明を行う。
- **意見を書き出す（5分）**…説参加者は自身が第1ラウンドで参加した国の文化遺産保護や文化遺産国際協力の特徴と、第2ラウンドで参加している国の比較をする。
- **話し合い（30分）**…集まったコメントを見ながら意見を交換する。日本の国際協力との比較も意識し、話し合う。

各グループで寄せられたコメントの一部を紹介する。

韓国

韓国のグループでは、韓国の文化財保護法に関する質問や、第1ラウンドで参加した国との比較などについてコメントが寄せられた。特に、連邦制をもつ国との対比について話し合われた。

- ・韓国の文化財保護法の中での世界遺産の位置づけ
- ・ベルギー、複雑な連邦制のもとで共同体毎のスキームあり
- ・ベルギーは文化遺産国際協力に関する法律がなく、地域共同体が主体的に行っているとのことだった。韓国は国家からのトップダウンのイメージ

ベルギー

ベルギーのグループでは、第1ラウンドで参加した国と比較して、体制や法律、協力相手国の傾向の違いなどについて話し合われた。また、日本との比較では、EUのような国家の枠組みを超えた主体がないことが指摘された。

- ・国内教育機関を通した人材育成
- ・文化省がNGOに資金援助して、若者向けに修復現場での掃除や現場での作業を体験させ、興味を持たせる取り組み（フランス）
- ・文化財を含めた景観保護の法律について、以前に比べると地方に分権化されてきたベルギーではどうか（フランス）
- ・韓国は国家意志が文化財保護とかなり相関するが、ベルギーはどうか
- ・韓国の体制と比べるとベルギーのシステムは細かく分離されていて統一感が乏しい感じ

フランス

フランスのグループでは、第1ラウンドに引き続き国内の景観保護に関心が集まった。国際協力に関しては、地方が独自で行う活動や、フランス極東学院についての話題が挙がった。

- ・人材育成などの財源はどこからくるのか
- ・極東学院に対する現地の評価
- ・文化財保護のための登録が持主意向に拘らず行われることについて
- ・管理はスムーズに行われているのか？
- ・景観保護について法律や規正が強いことに感心し、ずっと昔から始まっていることにおどろく
- ・地方行政レベルでの国際協力

ドイツ

ドイツのグループでは、旧植民地に対する姿勢や、文化財の返還に関する話題が挙げられた。第1ラウンドで参加した国との比較では、「人材育成」や「連邦制」といったキーワードが挙げられた。

- ・植民地 … 他欧州国は植民地時代の遺産を保護しているが、ドイツは前面に出さない
- ・人材育成 … オランダではあまり予算がついていないとのこと
- ・連邦制 … フランスは集権国家、イタリアは法体制としては“国”でまとまる
- ・外務省 … 支援の一貫性はあまり見えてこない→地域まんべんなく支援する

イタリア

イタリアのグループでは、考古学的な調査よりも修復に関する国際協力が多いことや、修復技術の高さが話題に上がった。また、調査・研究の資金源について、日本や他の国との比較がなされた。

- ・西バルカン（ドゥブロヴニク、モスタル）のユーゴ紛争で破壊された文化財の修復について知りたい（イタリアが隣国なので）
- ・フランスでは、国内文化財保護の法体系がフランス革命後できたとの事だが（文化財が破壊されたということからできた）、イタリアには同様な法律はあるか
- ・イギリスは考古学、イタリアは保存修復を重点とした国際協力？
- ・イギリスは政府が最近支援を本格化している。むしろチャリティ団体、大学等が中心的役割を果たしてきた
- ・ドイツ連邦 動産文化財→連邦単位 不動産文化財→州ごと

オランダ

オランダのグループでは、国際協力の相手国の傾向という視点で、オランダと第1ラウンドで参加した国との違いが話し合われた。また、オランダの国際協力の特色としての緊急援助についても関心が集まった。

- ・ドイツと比較一国の規模
- ・ドイツと比較一“植民地”明確？
- ・韓国と比較一国外の文化財を取り戻す動き
- ・日本と比較一緊急援助の予算
- ・Cultural Heritage援助対象の選択⇔国家政策
- ・歴史との向き合い方（歴史との距離感）が戦略に影響

英国

英国のグループでは、民間資金による文化遺産保護の活動や、旧植民地との関係に関心が集まった。民間の活動が活発な英国に対して、日本では文化遺産保護は国や行政が行うものという意識があるということも話題となった。

- ・植民地への援助で現地からの反感はないのか
- ・アジアへの援助は全体の中では少ないか
- ・チャリティ、民間、ファンド活用
- ・イタリアとの比較→ICCROM等、国内でのキャパシティビルディング中心＝英 国外拠点
- ・民間による支援 英国は市民理解が一定以上に得られている？
- ・文化政策と経済活動のぶつかり合い



ファシリテーターによる各国の報告

各テーブルのファシリテーターより、各国の文化遺産保護の特徴や、グループでの話し合いで出た意見などについて報告した。

韓国

●韓国の文化遺産保護の背景

- ・韓国が国際協力を始めるのは2010年にOECDに加盟し、援助国委員会に入って以降のことである。
- ・韓国の文化遺産保護に関わる人材は、戦後しばらくは日本に留学する人が多かったこともあり、文化遺産保護に関する法律も、初期の段階では日本の文化財保護法と近いものだったが、改訂を経て今では独自の性格を持っている。

●韓国の文化遺産保護の法律・体制

- ・2016年に改訂された韓国の文化財保護法では、動産文化財に関する法律と不動産文化財に関する法律が分かれている。また、文化遺産国際協力の根拠として、人類に関する貢献ということが明記されている。
- ・法律における日本との違いとしては、国外にある韓国の文化財に関する対応が文化財保護法に明記されていること、国宝や重要文化財などの修理には国家ライセンスが必要とされるということが挙げられる。
- ・文化遺産の防災に関してはあまり対応がされていない。

●韓国の文化遺産国際協力

- ・文化遺産国際協力については、文化財財団がほぼ一括して担っている。

ベルギー

●ベルギーの文化遺産保護の概要

- ・ベルギーは連邦国家であり、不動産文化財に関しては地域政府、動産文化財と無形文化遺産に関しては共同体政府、と文化遺産の種類によって管轄する政府が異なるだけでなく、一部、連邦（国家）政府の管轄事項も存在する。3つのレベルでの法制に依っているため、国全体の全容把握が困難である。
- ・ICOMOSの書記長を務め、ヴェニス憲章の起草者の一人であったレイモン・ルメールはベルギー出身であり、第二次世界大戦後のベルギー国内の保護体制の構築、それを元にした国際協力の体制作りにも貢献した。
- ・EUやユネスコなど国際社会への協調路線が基本となっている。

●ベルギーの文化遺産国際協力

- ・ODAの対象をアフリカ（14のパートナー国）に限定している。
- ・地域別の活動が目立つ。（そのため、世界遺産登録など国単位で行う事業については登録数などの地域間のバランスが懸案事項となっている。）
- ・フランダース地域の方が経済的に発展しており、国際協力も突出している。また、フランダース政府は無形文化遺産に特化したユネスコ信託基金の枠組みを独自に持っている。

●調査に関する今後の課題

- ・ベルギーはヨーロッパの大国に囲まれており、EUの本部があるということもあって、ヨーロッパ内のコンセンサスを取る上での調整役となっていることが多い。EUレベルでの方針や活動について調査することで、ベルギーの国際協力についてもより理解が深まるように思う。

フランス

●フランスの文化遺産保護の特徴

- ・法制度
 - －フランスでは建造物や遺跡の保存・修復の制度が早くから整っていたこともあり、修復建築家の資格制度や教育機関が充実している。
- ・在外の文化遺産関係の機関を拠点とした国際協力
 - －IFRE (Instituts français de recherche à l'étranger：フランス在外研究機関) やEFEO (École française d'Extrême-Orient：フランス極東学院) などの豊富な実績をもつ機関を拠点として、国際協力を行っている。
- ・青少年の教育普及
 - －NGOの取組み（文化遺産保護に関する合宿を行う。）
- ・地方都市主導の国際協力
 - －フランスの地方都市が、海外の同じような地理的条件をもつ都市で、町並み保存のノウハウを活かして国際協力を行っている。

●日本が文化遺産国際協力を行う上で参考ができること

- ・日本の伝統的建造物群保存地区の考え方や保存技術などは世界に誇る蓄積、内容を持っており、海外にも広められたらよい。一括した窓口があれば、海外からの協力依頼に応えることができるのではないかな。

ドイツ

●ドイツの文化遺産保護の特徴

- ・連邦制であり、州ごとの分権の特徴が強い。
 - －文化遺産国際協力における州と連邦との関係性については今後の調査の課題。
- ・ドイツの研究機関や大学の、国際分野における存在感
 - －DAI (Deutsches Archäologisches Institut：ドイツ考古学研究所) のもつ国際的ネットワーク
- ・旧植民地への支援を行っているヨーロッパの他の国と比較して、自国の歴史と国際協力の対象との関係性が明確ではない。第二次世界大戦での“負の歴史”という点も、国際協力ではあまり強調されることがない。
- ・最先端の技術を用いた文化遺産国際協力のアピール

イタリア

●イタリアの文化遺産保護の特徴

- ・とりわけ修復の分野に力を注いでおり、海外においては発掘調査よりも遺構や遺物の修復に重きを置いている。
- ・国外の文化遺産保護に積極的であると同時に、イタリア国内にある文化遺産の調査や保護のために国外から専門家がやってくるようなプロジェクトが多い。
- ・国内の文化遺産保護に関しては伝統的に中央集権的な色合いが強いが、最近は民間の資金を導入したプロジェクトも増えている。（しかしこれについては、私企業による独占につながるというような批判的な意見も出ている。）
- ・近年では国際協力においても民間資金の活用の重要性が訴えられている。

●日本が文化遺産国際協力を行う上で参考ができること

- ・「石の修復といえばイタリア」という定評を作り上げたイタリアに学び、日本の得意とする紙や漆の修復といった技術をブランディングする。
- ・日本の大学で修復を学べるコースを拡充する。
- ・日本の大学で修復の技術（保存科学）を学ぶと同時にヘリテージマネジメントや観光マネジメントを学べるようなコースを設立する。

オランダ

●オランダの文化遺産国際協力に関する方策の特色

- ・オランダが大航海時代と植民政策時代を通じて国外に残してきた有形・無形の痕跡に対する文化遺産国際協力のプログラム（Shared Cultural Heritageプログラム）
 - あくまでオランダの関わった文化遺産が対象である。
 - 旧植民地では必ずしも肯定的に受け止められているわけではない。
- ・文化遺産の緊急援助のプログラムが存在する。
 - 災害時の緊急援助を明確にプログラム化している。
- ・比較的小規模なプロジェクトに集中しているような印象を受ける。

英国

●英国の文化遺産保護の特徴

- ・多様な支援団体、助成金制度、チャリティーの財団がある。助成金についてはブリティッシュカウンシルに一本化されており、審査のプロセスが明解である。
- ・古いもの、あるいはHeritageという言葉に対する国民の関心が非常に高い。
- ・国と私の間にある公益団体（Charity）の活動の幅が広い。
- ・Heritage Lottery Fundという宝くじの収益を文化遺産保護に充てるなど、持続可能な文化遺産保護の仕組みが存在する。

●英国の文化遺産国際協力の傾向

- ・近年は中東や北アフリカの文化遺産の緊急性の高い分野の文化遺産について支援を行っている傾向がある。
- ・フランスやドイツと同様に、大英帝国時代から続く研究所が現地に存在し、その充実した海外拠点と大英博物館等が連携して調査や修復、人材育成を行っている。
- ・紛争地では軍と協力して文化遺産を保護している。

●英国の文化遺産国際協力に関する疑問

- ・旧植民地への援助に対して、国内で反感を招くことはないのか。



参加者からの発言

ファシリテーターからの報告を受けて、会場からも発言を募った。

参加者：ドイツ考古学研究所は世界中で活躍しており、学術面でトップを行っているように思う。私は今イランで調査をしているが、そこでも非常に力を持っている。最近、イランの留学生は大抵ドイツに留学しているが、英語で授業が受けられて学費が無料であることが理由だという。イランの考古学関係者の目はドイツ考古学研究所とベルリン自由大学に向いているというのが私の印象で、そういった研究所と大学の連携が重要であると感じた。

松 田：ドイツ考古学研究所は世界中に18の拠点を持っており、その予算は100%外務省から出ているというのが特徴的である。日本が参考とするにあたって重要な点であると思う。

参加者：オランダとベルギーのグループに参加したが、二つの国の旧植民地への態度が非常に違うと感じた。文化遺産の国際協力といってもやはり歴史を引きずっているし、今の国際関係もその影響を受けているのだと思う。旧植民地側の受け取り方も様々で、植民地時代の建築が取り壊されることもあれば、保存・活用している国もある。色々なケースがあるということに改めて感じた。

参加者：16年くらいブータン政府の職員として働いていた。支援を受け入れる側の人間だったので、あまりここにはそういう人はいないかと思い、少し感想を述べたい。日本の支援は技術的にもとても高く、本当に相手の国のことを考えて支援しているという印象を持っている。しかし欧州の国々と比較して、せっかく良いことをしているのに、あまり知られていないように思う。欧州の方は非常に上手に戦略的に支援をしていて、何かもっと、良い支援だというのがぱっと見てわかるような支援ができると、日本の強みになるのではないかと思った。

文化庁：日本は宣伝が下手というのは文化遺産の国際協力に限らず日本外交が昔からずっとと言われてきているところで、何とかしていかなければという意識は大いにあるが、反面それが日本のいいところとして理解されている面も少なからずあるように思う。色々な国と接する中で、日本に対して親身に正直に付き合ってくれる国が多いと感じていて、それはアピールということではなく真摯に国際協力を行ってきた結果、良い関係が築けているということではないかと思っている。だからといってそれで良いということではなく、良い関係を保ちながらも、うまく立ち回らなければならないのだと思う。ご指摘の点は対国内でより重要だということを感じていて、専門家の方々がこれだけ熱心に色々な国のために活動しているということ国内でももっと発信して、それに対するサポートを得ていかなければと思っている。こういった機会を通じて皆さんの声を聞けたことを非常にありがたいと思う。



ファシリテーターのコメント

改めてファシリテーターよりワークショップの感想やまとめを述べた。
最後に青木繁夫氏より総括を行った。

岡 村：イギリスの国民の反応など、質問に対して答えられないことがあったので反省しているところです。もう一回やればうまいこといくのではないかなと思わないでもないのですが…今回いただいた意見を顧みながらさらに英国について調べていけたらと思っています。

海老澤：先ほど話に出たドイツ考古学研究所は、1829年に設立され、1871年のまさにドイツ帝国が統一されて成立した年に国の機関になりました。その後アテネやカイロ、100周年の時にイスタンブールなど支所を拡大していき、第二次世界大戦を乗り越えて、つまり19世紀にまいた種が連綿と続いていって今に至っています。そのとりくみに日本が学ぶべきところがあるのではないかなと思った次第です。私は建築の歴史が専門で文化遺産国際協力は門外漢ですが、自分のような立場の人間が今回のような会に参加させてもらうことで、文化遺産国際協力の裾野が広がっていけばいいのではないかなと思いました。今回参加させていただいてよかったなと思っています。

藤 岡：コンソーシアムとしてこうしたワールドカフェスタイルの研究会は初めてということでしたが、私自身にとっても初めてのことで、うまくファシリテートできたかというところと反省はあります。ただ、理念と実践というのは必ずしも一致しないというのはしばしばいわれるところですが、今回の議論の中でも、書かれている国際協力のプログラムと実際の受け止められ方は全く違うということを経験することができたというのは収穫でした。どういった国際協力が有効かということを考える上ではやはり支援を受けている側へ行って話を聞かないと、実際に何が求められているのかとか、どういったアプローチでいくべきなのかということが見えてこないというのを強く感じています。もう一点、ヨーロッパでは国際条約に加えてEUの条約があったり、NATOの中で文化財に関する軍隊の演習プログラムがあったり、段々と地域全体としてスタンダードが上がっていくという印象がありますが、アジアで何ができるかということも日本がこれから考えていくべきところだと思います。

松 田：私ももう1ラウンドあればもう少しうまくファシリテーターとしての役割が果たせたかなという思いはありますが、それとは別に感じたことは、日本はもっと自分たちの活動を効果的にプレゼンテーションし、対外発信していかなければならないということです。今回の研究会の準備で調べていて感じたのですが、ドイツとイギリスは進行中のプロジェクトにしても、プロジェクト終了後に作成するレポートにしても、見せ方が上手です。こうした点は参考にすべきだと思います。また、大学との連携ももっと強化していくべきだと思います。海外での発掘調査をこれだけ多く行っているのですから、大学で保存科学を研究されている方々との連携を強めるべきだと感じました。課題としては、欧州評議会がどのような文化遺産国際協力の活動を行っているのかを調べねばならないということをお前回改めて感じました。他に、バイ（二国間の支援）とマルチ（ユネスコ信託基金を通じた支援など）の比率が変わると、日本に対してどのような影響が出てくるのかをこの先考えても良いのかなという気がしました。それと、文化遺産国際協力に関する法律を持つ国と持たない国とでは何がどう異なるのかということも、やはり注意して考えていきたいです。また、国ごとに国内の文化遺産保護の仕方に差や特徴がありますが、それと、その国が国外で行う文化遺産保護活動に関連性があるのかないのかも調べたいと思います。

井 内：この調査を立ち上げるときの話し合いにも関わっていたので色々反省する部分もありますが、それでも基本情報をこうやって並べて比較するだけでも、基準はバラバラではありますが、何か見える部分はあったのかなと思っています。これからもう少し発展させていけるのは、EUレベルでの動きの調査というのもそうですし、経済開発協力という切り口で比較調査をするというのも有効な手立てかと思った次第です。

羽 生：フランスを調べて思ったのは、人的交流の多さということ。フランスはファンを育てるのがうまいんですね。人がいかにフランスの文化を理解して、またそれを自分の国で広げていくかという、そういうためには先ほどから話があった教育機関が重要で、国際的な教育機関や研究所が世界各地にばらまかれている。そこを通じて現地の人といかに心を通じ合わせて協力関係ができるかという関係がフランスは非常にうまいのかなと思います。日本は海外に行って色々すばらしいことをやってきているし、現地の人に歓迎され、押しつけがましいことをしないという良さはあるのですが、その拠点となるべき場所がなさすぎる。あればきっと日本のファンが増えるし、日本の協力がもっとアピールできると思います。

総括：青木

ファシリテーターのみなさんの話と、今日議論したことを考えてみますと、キーワードがいくつか出てくるかと思っています。一つは「**植民地の問題**」、これはものすごく大きな問題で、日本も関わっていることなので、我々ももう少し真剣に取り組んでもいいのかなと思います。それから「**法律と組織**」の問題、これはそれぞれの国の成り立ちのバックグラウンドの違いがありますので、一概には言えないと思いますが、少なくとも先ほど話がありましたように国際協力に関する法律を持っている国と持っていない国がどう違うのか。特にイタリアなどは日本と比較的似たような動きをしていますので、そうした面をもう一度見ていったほうがいいのかなという感じです。あといくつかキーワードがありますが、当然「**お金の問題**」があります。日本の場合ですと政府予算が主体ですし、韓国の場合もほとんど政府予算で民間の資金というのはあまり入っていないのですが、ヨーロッパの場合は色々な資金ソースがあるようですので、もう少し我々としては民間資金をどう入れるかということに関してヨーロッパの事例を調べてみるのがいいかなと思います。先ほどブリティッシュカウンシルの話題が出ましたが、そういった海外の資金ソースのことも視野に入れて考えていったらいいのかなという感想を持ちました。それと「**人材育成**」、古くて新しいテーマですけれども、日本は海外拠点をほとんど持っていませんし、もっと重要なのは日本国内に国際協力人材を育てて受け入れる明確な拠点があまりない状況ですね。それは緊急の課題かと思っているのですが、なかなか予算的に難しい問題だと思います。ヨーロッパはEUという統合体があって、その下に国があって、その下に州や地域があってというかなり複層化した社会構造ですが、アジアはそういった複層的な体制というのはなくて、ほとんど中央集権を基本としているので、その地域構造を含めて今後我々がどう考えるか、人材育成にしても大学や中央組織だけでなく地方が関わっているので、そのあたりを整理し直したほうがいいのではないかなというように感じました。もう一つ、「**開発**」という言葉をもう一度見直した方がいいのではないかなという気がします。今後、持続可能な開発を取り上げた研究会をしようということで計画を練っていますが、従来の開発という我々の持っている概念は見直さないと、今後の国際協力に色々支障をきたすのではないかなと思っています。そのようなことを今回の議論の中で感じました。



参加者アンケート

アンケートには18名の回答を得た。



【ワークショップ進行について】

- ・日本国内で文化財保護行政について学んでいる身として、諸外国における状況を知ることができたのは貴重な経験でした。又、その一方で海外協力支援体制について考える上では国際機関や国際NGOがどのようにそれぞれ支援を行っているのかについて、もっと深く知ることが出来れば、各国の情勢について議論を深めることが可能だったかと思います。日本における状況との比較に関してはやや情報が不足していたように感じました。(20代男性/学生)
- ・各国の比較という点でなかなか自分では持つことのない視点でも様々な意見があり、新しい考えの開拓につながりました。自らの研究にもその視点を取り入れたいと思います。(20代男性/学生)
- ・欧州における文化遺産保護スキームの現状が分かり、興味深かった。(20代男性/公務員)
- ・参加者と双方向の研究会なのでよかったと思う。議論の時間がもう少し欲しかった。(30代男性/教育・研究機関)
- ・時間が短かったように思います。世界各国の文化財保護体制を比較研究する上では、やはりアメリカと中国ははずせないのではないかという感想を持ちました。(50代男性・公務員)
- ・仏国のグループに参加して、比較の点では（することができ）大いに勉強になった。(60代男性/教育・研究機関)
- ・国際協力という観点からは面白かった。特に人材教育の大切さ、普及と広報の大切さについてもっと具体的に行っていくことの必要性を感じた。(70代以上男性/教育・研究機関)
- ・ワークショップのやり方はとても良かった。意見も出しやすくまとまりがあった。少しセクションごとの時間が短いと思った。もう少し長ければもっと入りこんだ話が出来ると感じた。(20代女性/教育・研究機関)
- ・各国の文化遺産保護を横断的に学ぶ機会は初めてだったので、国による違いや日本との共通点を知りました。文化遺産に関する法律や政策一つ取っても、国の規模や歴史的特徴がよく表れていて興味深かったです。(20代女性/学生)
- ・インターン生として参加させていただきました。文化遺産には興味がありましたが、保存・修繕であったり、国際協力については初めてこのようなワークショップに参加しました、知らないことがたくさんありましたが、各国がどのような取り組みをしているのかの比較、日本との比較が出来、とても勉強になりました。(20代女性/学生)
- ・ファシリテーターの先生方はとても円滑に議論をリードしていたと思います。(30代女性/会社員)
- ・各国で話し合う項目（教育制度、法、法の主体、行政、国際協力の内容etc）をゆるやかにでも統一できれば、より明確に比較が出来ると思いました。（ワークシートを用意する、ケーススタディーにするなど）(30代女性/教育・研究機関)
- ・自分の参加する国のことを少し勉強しておけばよかったと反省しました。全く知らない状況でも楽しめました（勉強になりました）(30代女性/教育・研究機関)
- ・非常に有意義で興味深いテーマであったと思う。2国間、あるいは日本との比較を設定した第2ラウンドは何を話し合えばいいのか明確ではなしやすかったが、第一ラウンドは情報交換に終始し、何を議論すれば良いか少し不明確だった。何分何をして次に何を話すかを、スクリーンに映すだけでなく全体に通知した方が良かったかもしれない。(30代女性/教育・研究機関)
- ・今までの限られた情報のみでなく様々な角度からの興味、お話が伺えて良かったです。(60代女性/その他（自営業）)

【今回のワークショップで得たもの、学んだもの】

- ・日本の今後の文化財のあり方について考える上で、日本における法体制や行政制度等のどこに強みがあり、それを活かした文化財の運用について考えていく良いきっかけとなりました。又、SDGsを念頭に置いた海外協力を拡げていく中でキャパシティビルディングのあり方をどのように行っていくべきか考えていく必要性（根拠や支援制度等）を感じました。（20代男性/学生）
- ・参加者の皆様の文化遺産保護に係る知見が豊富で、まず日本の文化遺産保護についてしっかり学ぼうといった気持ちが持てた。（20代男性/公務員）
- ・日本の文化外交の問題点・課題が浮かび上がったのではないかと。（30代男性/教育・研究機関）
- ・知らないことばかりで二か国とはいえ参加者のお話や意見を伺えて勉強になりました。日本はアピールベタといわれるが、アピールとは日本が日本がということではなく、技術や哲学的な実体があり、多くの実践と議論を通じてその価値が認められていくのではないかと思います。そうでないと単なる自己主張、自慢や帝国主義的なものになってしまうのではないだろうか。（50代男性/教育・研究機関）
- ・イギリスとイタリアから考古学と修復という分野の違い、財政面でイギリスが民間、イタリアが政府中心というのも文化財に対する考え方の違いにあることが分かった。（60代男性/教育・研究機関）
- ・フランスの文化財保護について改めて根の深さを感じた。（70代以上男性/教育・研究機関）
- ・各国への興味を持つきっかけを得ることができ、それぞれの概要を知ることができた。（20代女性/教育・研究機関）
- ・各国の文化遺産国際協力に関する現状や体制を体系的に理解することができた。（30代女性/教育・研究機関）
- ・各国の文化遺産の特色、特に何に力を入れているか、海外の文化遺産のPR、海外の文化遺産の方針と歴史的背景。（30代女性/会社員）
- ・支援対象の選別理由の一つとして旧植民地が入ることが興味深かったです。（30代女性/教育・研究機関）
- ・参加したグループの国の文化遺産国際協力に関して（協力機関、強い分野）、参加していないグループのものも掲示を見られて良かったです。日本の国際協力の状況。（30代女性/教育・研究機関）

【今後このテーマをどのように深めていったらよいか】

- ・日本の有している知識や強みを今後海外協力支援に用いる際に、諸外国の手法と比較し、どのような点を日本において修正して支援を拡大していくべきかという問題を考えていくべきかと感じました。（20代男性/学生）
- ・ファシリテーターの説明と意見交換の時間配分に工夫が必要。やはり欧州諸国は文化先進国ということで、日本は学ぶことが多いと実感。（60代男性/教育・研究機関）
- ・ファシリテーターの方、ご苦労も多かったと思うが、この方法をもう何回やるともっと深まるのではないのでしょうか。（70代以上男性/教育・研究機関）
- ・[ファシリテーターの] 感想でもありましたが二回目があっても良いなと思います。（20代女性/教育・研究機関）
- ・海外での文化遺産保全活動の評価、特に受け入れ側のfeedbackやそれが当初の目標をどのように達成したかのreview（30代女性/会社員）
- ・動産についても、少し話し合えると良いと思いました。（遺産と銘打っているのですが…）（30代女性/教育・研究機関）
- ・もうすでにグループトークの中に組み込まれていましたが、日本が文化遺産の分野で、国際協力する事はどうしたらいいか。政府・教育機関（30代女性/教育・研究機関）

文化遺産国際協力コンソーシアム 第23回研究会(ワークショップ)
「諸外国における文化遺産保護の支援と協力を知る・語る」 報告書

JCIC-Heritage the 23rd Seminar
“Workshop: Knowing and Telling About Support and Cooperation
in Conservation of Cultural Heritage in Various Countries”

発行日：2019年3月27日
Published 27 March, 2019

編集・発行：文化遺産国際協力コンソーシアム

Publisher : Japan Consortium for International
Cooperation in Cultural Heritage

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43
独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所内
Tel:03-3823-4841 Fax:03-3823-4027
E-mail:consortium@tobunken.go.jp
URL:<https://www.jcic-heritage.jp/>



JCIC-Heritage

文化遺産国際協力コンソーシアム